

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

2019年10月7日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 経済学研究科

職 名・学 年 特定講師

氏 名 佐々木 周作

助 成 の 種 類	<b>2019年度 ・ 国際研究集会発表助成</b>	
研 究 集 会 名	The 2019 IAREP/SABE conference (2019年度IAREP/SABE合同カンファレンス)	
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )	
発 表 題 目	Pure Altruism, Warm-glow, and Burnout: The Case of Japanese Nurses	
開 催 場 所	アイルランド, ダブリン, Croke Park Conference Center	
渡 航 期 間	2019年8月31日 ~ 2019年9月6日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000円
	使用した助成金額	300,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助 成 金 の 使 途 内 訳	参加登録料: 47,000円
		渡航費(海外航空券): 187,000円
宿泊費: 66,000円		
(端数切捨て)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 助成金の使用方法などがとても柔軟で、目的のために使用しやすく、不便を全く感じませんでした。おかげで学会発表の準備に集中することができました。ご支援いただき、大変感謝しております。	

## 成果の概要／佐々木周作

2019年10月7日

この度、京都大学教育研究振興財団より「国際研究集会発表助成」を受け、2019年9月初旬にアイルランドのダブリンで開催された「The 2019 IAREP/SABE conference」に参加し、口頭で研究報告を行って参りました。この学会は、私の専門分野である「行動経済学」の代表的な国際研究集会です。キーノート・スピーカーをはじめ、国際的に著名な研究者が多数参加されるので、私の研究に対して、彼らから直接アドバイスを受けられる大変貴重な機会となります。アドバイスを受けることで、私が報告する研究の質は高まり、将来的に、インパクトの高い国際学術雑誌に掲載できる可能性も高まることが期待できると考えて、継続的に参加しています。

今年度の集会では、「Pure Altruism, Warm-glow, and Burnout: The case of Japanese Nurses」というタイトルで口頭報告するとともに、報告するセッションの座長も担当しました。このような活動を通じて、以下の成果が得られた、と考えています。

一番の成果は、報告した研究を英語論文化し、国際学術雑誌に投稿するにあって、有益なコメントをもらえたことです。報告した研究では、日本国内の医療機関に勤務する看護師501名を対象に独自実施したアンケート調査の個票データを使用して、利他性と呼ばれる、他者配慮に関する行動経済学的特性とバーンアウト（心理的な燃え尽き症状）の関係を実証的に分析しました。行動経済学では、他人の満足が自分の満足と正で相関するような、共感性の高い特性を利他性として捉えています。分析の結果、利他的でない看護師に比べ、利他的な看護師ほどバーンアウトしている可能性が高いこと、同時に、睡眠薬・精神安定剤・抗うつ剤を常用している可能性が高いことが分かりました。

従来、看護師は利他的であることが望ましい、と考えられてきました。実際に、看護師の育成機関の教育方針の中に、「相互尊重と利他の精神を価値基盤に行動する看護師を育てる」という文面をしばしば見つけることができます。一方で、上記の分析結果からは、利他的な看護師ほどバーンアウトのリスクが高いことが示されました。分析結果を深掘りすることで、どのような資質の看護師を育成すべきか、どの資質の看護師をどの部署に配置すべきか、などの看護現場の実務的な課題の解決に貢献できる可能性があります。

また、この分析結果を深掘りすることで、実務的にだけでなく学術的にも貢献できる可能性があります。これまで、利他性は寄付やボランティア、節電・省エネなどの向社会行動の源泉となる動機として、注目されてきました。つまり、社会的に望ましい行動を促すものとして評価されてきました。しかし、上記の分析結果は、利他性に負の側面があることを示唆するものです。負の側面は、これまでの研究で指摘されることはほとんどありませんでした。

一方で、上記のような実務的及び学術的貢献を、国際学術雑誌のエディターやその読者がそのまま認めてくれるかどうかは分かりません。例えば、看護師は利他的であることが望ま

しい、という通説は日本独自のものかもしれません。その場合、看護師は利他的である方が望ましいのか、という問いを立てて実証的に分析することを、海外の読者は面白いと思ってくれない可能性があります。同様に、利他性の負の側面にスポットを当てることを、どれくらいの人たちが面白いと感じてくれるかも分かりません。

私は、今年度の集会に参加し口頭報告することで、上記の2つの点について参加者の意見を直接聞きたい、という狙いを持っていました。結果として、どちらの点についても、海外の研究者も同じように面白いと感じてくれるはずだ、という自信を持つことができました。例えば、看護師は利他的であることが望ましい、という通説は、ドイツなどの欧州諸国にも同じようであることを参加者が教えてくれました。また、私が座長を担当したセッションでは、同じように、利他性を含む向社会性の負の側面に注目した実験研究を報告した研究者がいました。

海外の研究者との意見交換から得られた知見は、英語論文化の際、上記の分析結果をどのようにアピールしたら良いか、を考えるにあたって大変参考になるものです。そして、これらの知見は、国際研究集会に実際に参加しないと得られないものだった、と考えています。

他にも、「The 2019 IAREP/SABE conference」の多数の研究報告セッションに参加することで、海外の行動経済学者が、今どのようなトピックに関心を持っているか、を把握することができました。例えば、欧州の研究者たちは、Brexitなどの影響から外国人差別に強い関心を持っており、関連する研究報告セッションが複数ありました。また、実験室実験研究は、職業のように、社会に存在する役割を被験者に担わせて行うものが多く、伝統的な実験室実験研究からの変化を実感することができました。

これらの経験は今後の研究者人生の糧になるものだ、と確信しています。そのような経験をさせてくださった財団の皆様に、改めて、感謝申し上げます。